

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

序文

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-01-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00009320

序 文

須藤 健一・清水 久夫

土方久功は、日本のゴーガンと呼ばれ、東京美術学校（現東京芸術大学）の彫刻科を1924（大正13）年に卒業して、「南洋原始の美」を求めて1929（昭和4）年にミクロネシアのパラオ諸島に渡った。その後、土方は、1931年10月から6年間サタウル島に滞在するなど13年間を南洋の島に暮らし、彫刻や絵画などの創作活動と民族学的研究を行った芸術家かつ民族誌家である。その研究成果は、8巻本の『土方久功著作集』（三一書房）などに集大成され、そのうち4巻は英訳されて現地の人々に送られている。

土方久功は、東京美術学校在学中の1922年7月から1977（昭和52）年に亡くなるまで「日記」を書き綴っている。その日記は、本館で所蔵している。それは、編者の須藤健一が土方の生前（1973年）に土方邸を訪問してミクロネシア調査について話を聞いたことや、土方の著書『サテワヌ島民族誌』を校訂（1982年）したことなどの縁で、須藤が本館に勤務していた1986年に、土方敬子夫人からその日記を本館に寄贈されたものである。本館では、それを民族研究アーカイブス「土方久功日記」として公開している。

一方、編者の清水久夫は土方日記の翻刻を進めてきた。清水は元世田谷美術館の学芸員で、土方の死後、土方夫人から土方の作品や日記などの処置について相談され、作品の一部は世田谷美術館が寄贈を受け、日記を本館に寄贈することを勧めた人である。そして、清水は、土方夫人（1998年死去）の希望でもあった土方日記の出版を計画し、自ら全日記をコピーしてワープロによる翻刻作業を行ってきた。前巻までに1922年7月から1929年4月までの活字化を終えて、刊行した。本巻（第Ⅲ巻）では、1929年4月から1932年2月までを掲載する。

本館所蔵の土方日記は、B5版のノート123冊からなる。とりわけ、1929年から42年にかけての南洋群島滞在中の日記は、神話、伝説、社会組織、出来事などを詳細に記したフィールドノートであり、またその間に南洋を訪ずれた中島敦、丸木俊子などの作家や画家との交流、杉浦健一や中川善之助などの多くの研究者を支援したことなどについても記述している。土方日記は、中島敦研究家にとっては中島の南洋生活と作品の題材源についての情報、人類学者にとっては土方の描いた民族誌や戦前のオセアニア研究の動向などを把握するうえで貴重なデータである。

本館では、土方日記をアーカイブスとして公開しているものの、日記の記述から80年を経ており、紙質の劣化と文字の不鮮明化が著しく、現段階で活字化し長期的な利用と広範な活用が可能な形で世に出すことが本館の責務と考える。土方日記の出版に当たっては、土方の遺族から著作権等の承認を得ている。

以上のような背景から、土方久功日記の学術的な意義を考慮して本刊を『国立民族学博物館調査報告』として出版することにした次第である。

図1 パラオ全島 (青柳 1985 : 21 を修正)

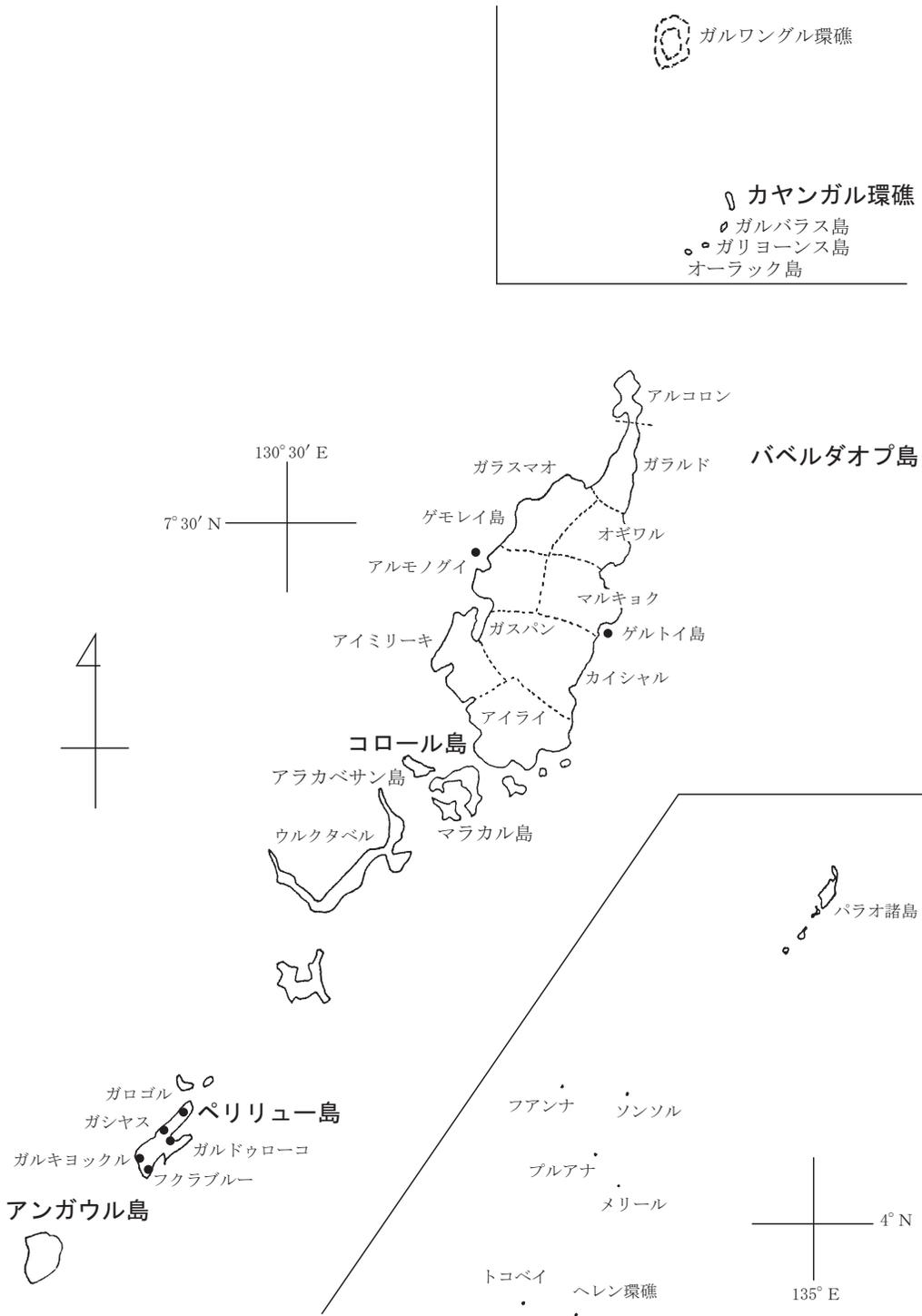


図2 バベルダオブ島とコロール島 (青柳 1985 : 284 を修正)

